

## 発達障害児の学齢期支援についての一考察 ～SSTグループ参加者へのアンケート調査から～

発達医療センター 花北診療所  
作業療法士 仲谷早恵  
臨床心理士 木田裕子  
小児科医師 小寺澤敬子

### 【はじめに】

姫路市総合福祉通園センターでは、平成 8 年度から平成 31 年度までの 24 年間、学齢期の発達障害児に対する SST グループを実施してきた。これまでの実践を振り返り、今後の当センターにおける学齢期支援のあり方を見直すことを目的に、過去の参加者にアンケートを実施したので報告する。

### 【当センターの SST グループの概要】

対象：市内の通常学級に所属する小学生で、発達障害の診断があり、知的には明らかな遅れのない児童を対象とした。

方法：1 グループ 8 名程度にグループ分けし、各グループ 3 名のスタッフで対応した。1 回につき約 1 時間とし、月に 1, 2 回の実施で年間通して全 16 回を設定した。

SST のテーマに沿って、プリントや動画を用いた学習と、ロールプレイやエクササイズを通した疑似練習を行った。保護者に対しては、医師による勉強会や、心理士をファシリテーターとしたグループワークを実施した。

目的：「ソーシャルスキルトレーニング」が目的であることは前提であるが、発達障害の子ども達が、限られた時間と環境で学んだことを理解し、実生活で活用していくことは容易なことではないのも現実である。それでも、グループでの経験や知識が自信となり、今後の成長のきっかけになることを期待してプログラムを提供している。将来を見据えたプログラムであるため、保護

者支援は特に重要視している。SST で学ぶ内容や、その学びの過程を通して、子ども達が学び損ねやすい事柄やその学びの特徴を知り、より子どもの理解を深めていくことが、今後起こりうる問題解決の一助になることを期待している。

### 【アンケートの目的】

上述のように、SST グループスタッフとしては、数年後の将来も支援したいという目的を持ってプログラムを提供してきたが、参加した本人のその後に役立ったのか、保護者が子育てする上での助けになったのか、後日談を知る機会ほとんどない。そして、SST グループを開始した当時と比べると、発達障害に関する情報や支援サービスも大きく増加した現在、本人や保護者のニーズも変化していることも予測される。それらの意見に耳を傾け、改めて今後の学齢期支援のあり方を検討していくことを目的にアンケートを実施した。

### 【アンケートの方法】

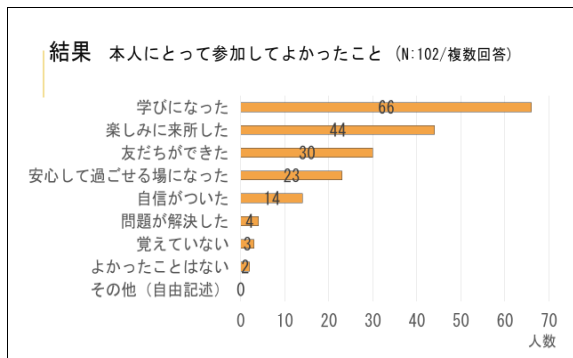
平成 18 年度以降に参加した児童の保護者を対象に、郵送、無記名でアンケートを依頼した。

本人、保護者それぞれにとって、「参加してよかったこと」、「役に立った SST の内容」、「現在も役に立っているか」を選択肢で、「これまでの子育てにおいて必要性を感じた支援」、「現在必要だと感じる支援」を自由記述で、回答を求めた。

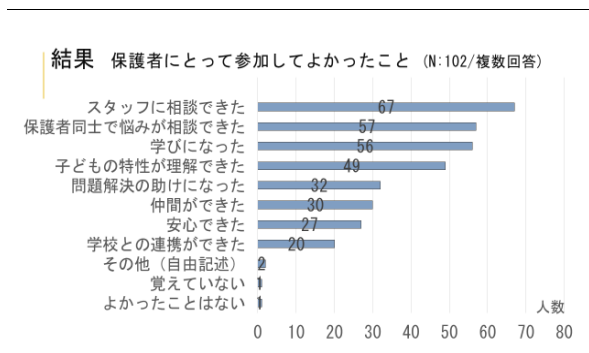
【結果】

有効送付数 215 名中、102 名の回答を得た。対象者の現在の年齢は、小学生 30 名、中学生 21 名、高校生 26 名、高校卒業以上が 25 名で、男性が 83 名、女性が 19 名であった。

「本人にとって参加してよかったこと」は、「学びになった」が最も多く、回答者の 6 割以上が選択した。次いで、「楽しみに来所した」、「友だちができた」、「安心して過ごせる場になった」と続き、グループが居場所のひとつになっていたことも読み取れた。一方で、「問題が解決した」と答えたのは 4 名のみであった。



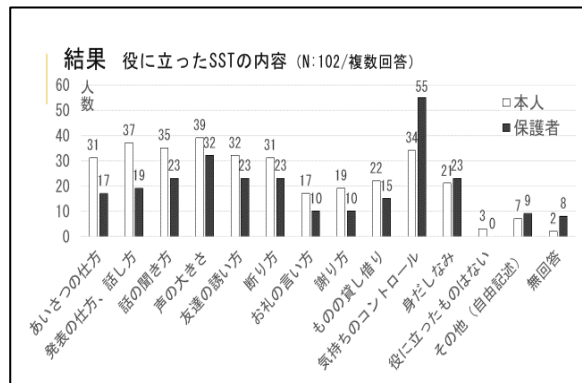
「保護者にとって参加してよかったこと」は、「スタッフに相談できた」、「保護者同士で悩みを相談できた」を回答者の半数以上が選択し、精神的な支えになっていたことが伺えた。次いで「学びになった」、「子どもの特性が理解できた」、「問題解決の助けになった」と続いた。



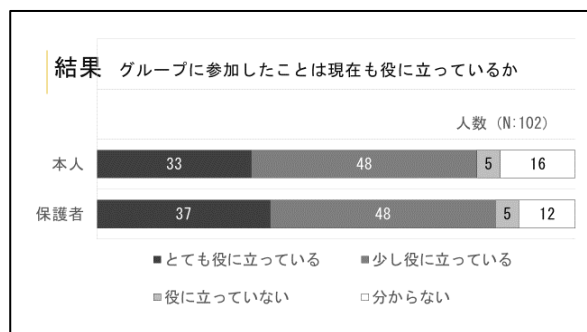
「役に立った SST」に関しては、白いグラフが「本人」、黒いグラフが「保護者」を示している。

本人の役に立った内容は、「声の大きさ」、「発表の仕方や話し方」、「話の聞き方」と、シンプルな項目が上位となった。プログラム提供にあたってスタッフが一番難しいと感じていた「気持ちのコントロール」が次に続いたのは意外な結果であった。

「気持ちのコントロール」に関しては、保護者も半数以上の回答者が役に立った項目にあげていた。



「グループに参加したことは、現在も役に立っているか」については、「とても役に立っている」と「少し役に立っている」が、本人 79.4%、保護者 83.3%で、それ以外は「役に立っていない」、「分からない」と答えた。



「これまでの子育てで必要性を感じた支援」と「現在必要だと感じる支援」については、全回答者 102 名中、「これまで」に 79 名、「現在」に 58 名の回答があった。

中学生以上の年齢群で、「現在必要だと感じる支援」に関する記述が減少し、「今は困っていない」と明確に記入があるケースも数名ずつあった。

幼児期から小学校時代に関しては、どの年齢群からも意見や訴えが多かった。

「過去にとっても辛い経験をした」もしくは「現在その真っ只中である」というケース、逆に、「この時期に適切な支援を受けた」もしくは「現在適切に支援されている」というケース、それぞれの立場での回答ではあるが、そのポイントは共通していた。

まずは、この時期には特に保護者の精神的な支えが必要であること、子どもの特性や関わり方を知っていくことが育児の助けになること等、保護者支援を求める意見が多く、そのためにも、相談窓口や学校などに、正しい知識と理解ある対応を望む意見が目立った。

中学生以上では、「子ども自身が安心できる居場所」や、「本人が相談できる第三者」など、本人支援を求める声が増加した。また、「ソーシャルスキルの必要性」については、全ての年齢群でさまざまな内容が挙げられ、求められるスキルには年齢群によって特徴があった。

小学生では、時間割や整理整頓といった身近な身辺管理や集団参加、嫌なことは嫌と言う、などの、基本的なコミュニケーションスキルが中心となった。

中学生になると、スケジュールや時間、清潔、服薬、物事の優先順位、などの自己管理を求められ、

高校生では、お金やスマホ等の管理、常識やマナーの必要性など、自立への下準備の時期であることが汲み取れた。

また、高校卒業以上では、常識やマナーに加え、自分自身の特性理解や、困ったら相談するといった問題解決力など、社会生活を意識した内容となった。

小学生	基本的なスキル 例) 時間割、整理整頓、集団参加、意思表示
中学生	自己管理 例) スケジュール、時間、清潔、服薬、優先順位
高校生	自立の下準備 例) お金やスマホの管理、常識やマナー
高卒以上	社会生活を意識 例) 自己理解、問題解決能力

### 【考察】

アンケートの項目や選択肢の内容、回収率など、方法上の限界は考慮すべきではあるが、これらの結果について考察する。発達障害児に対する SST には、般化しにくく即効性に欠ける等の難しさもあるため、「効果がなかった」という意見も多いのではないかと予測していたが、今回は肯定的な回答が中心であった。

子どもの学びを評価する中に、「後になって役立った」という記述が複数あったこと、子どもの「問題が解決した」のは 4 名でも、保護者の「問題解決の助けになった」のは 32 名だったこと等から、SST に即効性はなくても、後にそのエッセンスを活かせる可能性が伺えた。

また、どの年齢群にもソーシャルスキルの学びにはニーズがあり、発達障害の特性を踏まえた SST の必要性が感じられた。保護者は「相談できたこと」を最も評価され、精神的なサポートを重視するとともに、子どもの特性や対応のコツが分かることによる、親子の成功体験が安心につながっており、育児に悩む低年齢からの適切な療育的介入は有効であると考えられる。

一方、相談窓口や学校などの理解不足に関する悩みが多数あり、情報が増加した現在でも身近な理解者は少なく、育児不安の高さが伺えた。

また、困りごとがあっても相談できず、家庭の中で混沌と不安を抱えているケース

も複数あった。今回のアンケートに回答がなかった約半数の中には潜在的にこのようなケースも存在することが推測される。子どもを取り巻く関係者への後方支援、保護者同士のネットワーク、「困った時は相談できる」という相談機関との信頼関係、等の必要性を感じる結果となった。

#### 【おわりに】

当センターの SST グループは、さまざまな情勢の変化もあり 2 年前に終了とした。もちろん学齢期の支援が不要になったわけではなく、昨年度からは新たな支援体制の構築に向けてワーキングチームが始動した。今後は学校現場や総合教育センター等との連携をより充実させ、それぞれの役割を精査しながら、当センターとして必要な支援を見極めていく必要がある。今回のアンケート結果も、今後の支援体制に活かしていきたい。

#### 【付記】

本論文の要旨は第 60 回日本児童青年精神医学会総会にて発表した。